

いろいろのまわりに敷いたむしろにごびりついているご飯粒を、水でふやかして煮て食べた。

七年には別司で打ちこわしがおきた。八年には疫病もはやった。河和田の谷で五百人ちかくの人が死んだ。絶えた家も多かった。

米の値段はあつという間に四倍にはねあがった。たとえお金があつても米そのものが底をついていた。百姓も今日を生きるために、かえすあてもない金を、なけなしの土地を担保に借りたのであった。

椀作りの片山は人口の割に田畑が少ないので、鯖江藩のお救い米に頼っていてはごうにもならなくなつた。村には、その昔男大迹皇子からもらったというお墨付きがあつた。この村の宝を、川島の庄屋で稗三儀ととりかえてもらつて飢えをしのいだという。

上河内では、鯖江藩におさめる年貢米がないので、柱松の山神様の樺の木を伐つて代わりにおさめたそうだ。

つうしたききんのたびに金持ちはますます土地をふやし、貧富の差は大きくなっていったのである。

#### ④4 拓かれた野の

継体天皇の皇女茨田姫が、尾花に住んでおられたころ、河和田は、荒地や沼が多くて人の住めないところが多かつたのです。

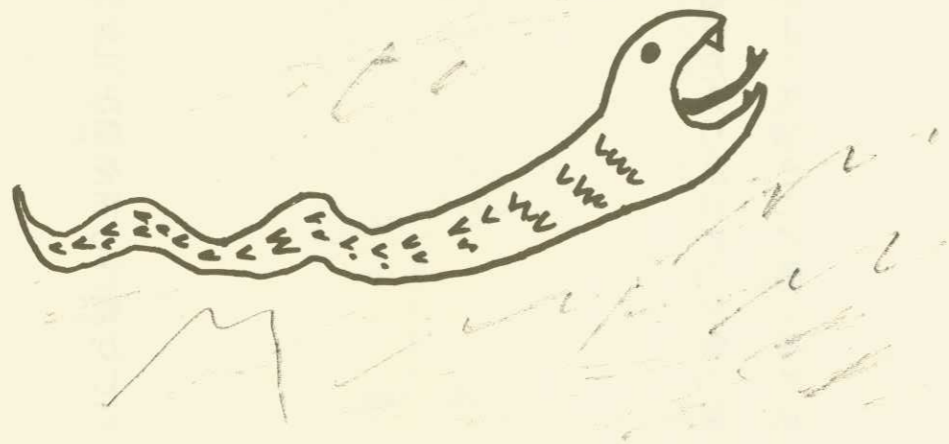
茨田姫は、みんなが住みやすい土地にしたいと、村人に野原を開墾するようにお命じになりました。

そのころ筋生田は、一面雑草の茂る荒地で、大きなうわばみ(大蛇)が棲んでいました。

さて、いざ、開墾しようとして筋生田に来てみると、ちようびうまい貝合にとぐろをまいて眠っていました。

「しめしめ、よう寝ていびるぞ、早う草をかって、このまわりにつみ上げよう。」

そして、草に火をつけると、うわばみを焼きころしてしまつたのです。



こうして、はじめて出来た土地を野といいました。  
この野を中心に、だんだん田畑がふえていきました。  
あるとき、弘法大師の教えをうけた人がやってきて、ここで薬草のあざみ草を作って乾かして  
大和地方に売りにいきました。  
それから村人もあざみ草を作るようになったのです。  
このあざみ田が、「あぞうだ」になったということです。

#### ④5 こんか虫おくりのはじまり

これは、筋生田で戦国時代に起こった出来事や。その日村では、敵味方入り乱れての合戦の最  
中やった。馬にまたがった勇敢な武将が、ここが勝負所とみて、勢いよく先頭きって敵に攻め込  
んだときのこと。

「皆の者、いまぞ。我に続けえ。」  
敵はあまりの迫力に恐れおののき、次々と田んぼの中へ逃げ出した。  
武将はますます勢いに乗り、敵を蹴散らそうと馬に  
気合を入れた。

ところがや、馬は慣れん田んぼの中を走ったもんや  
で、小さな稲株に足をとられ、ドッテーンとこけてし  
もた。  
放り出された武将、我にかえり何とか立ち上がったが、  
時既に遅しで、大勢の敵に囲まれてしもてた。  
形勢は逆転、勝ちを確信していた武将の無念さは  
半端やなかった。



「無念じゃ。まちががなく勝っておったのに。あの稲株さえなければあ…」  
武将は敵ではなく稲株を恨みながら息途絶え、その年の戦は終わった。